

論文審査の結果の要旨および担当者

| | | |
|------|-------|---|
| 報告番号 | ※ 甲 第 | 号 |
|------|-------|---|

氏 名 全 弘起

論 文 題 目

カ節を持つ構文の記述的研究
—間接疑問の周辺—

論文審査担当者

主査 名古屋大学准教授 志波 彩子

委員 名古屋大学教授 杉村 泰

委員 名古屋大学教授 林 誠

委員 福岡大学教授 江口 正

論文審査の結果の要旨

本研究は、不定疑問の助詞「か」を従属節に含む引用構文（「～かと思う」等、以下カト構文）と、間接疑問構文の一種と考えられる「～かの 名詞」という構造を持つ構文（以下カノ構文）について、間接疑問構文との関係から網羅的かつ体系的に記述した研究である。論文は全7章からなる。

本論第3章では、まずカト構文について、大きく二種類あることが述べられる。一つは、「独白の疑問を直接引用しているもの」で、単純疑問引用（「何が落ちたのかと思った」等）、新たな気づき（「今日から新学期がはじまったのかと思った」等）などの下位タイプがある。もう一つは「文の個々の要素の意味から文全体の意味が導き出せないタイプ」、すなわち平叙文を「かと思う」が受けるような構文で、下位タイプとして非現実性認識（「地球が滅びるかと思った」等）と断定やわらげ（「こっちを選んだ方がいいかと思います」等）がある。本研究は、このようにまずはカト構文を分類した上で、それぞれのタイプの特徴を用例の観察に基づいて丁寧に記述し、各タイプ間の関係についても体系的に記述している。

続く第4章では、カノ構文について、下位タイプが網羅的に記述されている。カノ構文は、修飾節と被修飾名詞との関係により、大きく三つのタイプに分けられる。一つ目は、間接疑問構文に置き換えられるタイプ（「車の内部の電気部品が壊れているかどうかの検査（は必須である）」等）、二つ目は通常の連体修飾に言い換えられるタイプ（「どうして毎年夏の平均気温が上昇するのかの原因（については、誰も興味がない）」等）、三つ目は選言文に関わるタイプ（「生きるか死ぬかの瀬戸際（に追い込まれていた）」等）である。そして、それぞれのタイプは、さらに細かい下位分類がなされ、どのような名詞タイプが「～かの」という修飾を受けるのか、またそれぞれのタイプでは修飾節と被修飾名詞の関係がどのように異なるのかが詳細に議論されている。

第5章では、カト構文と間接疑問構文の関係が議論され、両者の相違点と両者が意味的に近づく条件が議論される。カト構文は従属節が肯否疑問である場合が多く、従属節に疑問詞を持たない例が多いのに対し、間接疑問は従属節に疑問詞を持つ場合が多いことを示し、これはカト構文が従属節の具体的な内容に焦点を当てているのに対し、間接疑問構文はカ節の疑問に対する答えに意味的な焦点を当てていることによるとする。こうした違いと連動して、カト構文の上位構文としての引用構文では、主節述語は原初的には既決（「言う」「思う」等）であるのに対し、間接疑問構文の主節述語は未決（「分からない」「知らない」等）が原初的なのだと主張する。両構文にはこのような本質的な違いがあるものの、主節述語が対処（「考える」「聞く」等）である場合には、意味的に非常に隣接し、重なってくることを示している。

第6章では、間接疑問構文をめぐって、日本語と韓国語の対照が行われている。日本語の「か」を従属節に持つ構文と韓国語の「-는지 (-neunji)」を従属節に持つ構文は、従属節の特徴や主節述語の特徴に共通点が多くみられることから、いずれも間接疑問構文であると主張される。一方で、韓国語には多様な疑問の形式が存在すること

論文審査の結果の要旨

から、「-는지 (-neunji)」による間接疑問構文は日本語に比べて制限が多く、タイプが限られていることが示される。特に、韓国語の「-는지 (-neunji)」は、二文連置構文と間接感嘆構文にタイプが偏っていることが明らかになった。このうち、間接感嘆構文の使用が日本語に比べて圧倒的に多く、韓国語の「-는지 (-neunji)」では間接感嘆構文が非常に発達していることが示されている。さらに、間接疑問構文の主節の述語については、日本語では対処タイプがもっとも多いのに対し、韓国語では未決タイプがもっとも多く用いられていることを指摘している。間接疑問構文の歴史的な発達には、未決タイプ、対処タイプ、既決タイプの順に進行したことに鑑みれば、日本語の方が間接疑問構文自体は発達している可能性がある」と結論付けている。

【口述試験の講評】

本研究は、「間接疑問」と「引用」という従来の研究では見過ごされてきた二つの構文の関係性について、その共通の側面と相違点を、意味的な面と構造的な面から丁寧に観察し、網羅的に記述した研究として評価できる。さらには、「～する+かと思えます」という形式で話し手の断定を和らげる新しい構文があることを指摘し、これと他の引用構文との関係を丁寧に考察した点、従来の研究ではほとんど記述のない「～かの名詞」という構文のタイプの種々相を初めて記述した点、これまであまり研究がされていない韓国語の間接疑問構文について、日本語と対照している点でも評価される。

一方で、構文の分析の仕方には、既存の構文との関係性がやや軽視されている側面が見られた。本来であれば、既存の「～と思う」が持つ意味と助詞「か」が持つ意味との融合により、「～かと思えます」という新しい構文が成立したと見るのが自然であり、このような観点から構文の意味と構成要素の意味との関係を丁寧に分析し考察する必要があったと思われる。また、コーパスから用例を抽出して分析しているが、用例数の決め方が恣意的であり、かつ対象とした用例数が何を意味するのか、またどのような制約があるのかという点についての議論が不足している点が指摘された。コーパスを用いた記述的研究における用例数と分布傾向との関係、また記述の網羅性との関係について、今後はより意識した議論が求められる。

以上のような課題が残されているものの、本研究は間接疑問と引用に限らず、広く疑問文の研究や認識動詞文の研究、連体修飾構造の研究などにも影響をもたらすものであり、博士学位論文に十分に値すると高く評価された。